

## 日本の子どもの文学—昨日・今日・それから

### 基調講演「展示会を企画して」

平成 23 年 5 月 14 日

講師：宮川健郎

宮川と申します。よろしくお願いいたします。2011 年 2 月 19 日に「日本の子どもの文学」という大変大きなテーマですが、割合小さなスペースの展示会が無事スタートしました。そして 3 月 11 日の東日本大震災の影響で延期していた講演会が、今日ようやく開けることになりました。多数の皆さま足をお運びくださりましてありがとうございます。神宮先生には今、『アーサー・ランサム全集』（全 12 巻 岩波書店、昭和 42-43）の改訳のお仕事で大変お忙しい中、御無理を申し上げて講演をお願いしました。ありがとうございます。

「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料に見る歩み」展は、ちょうど 2 年前に、昨年度末までお勤めだった齋藤友紀子館長から企画のお話があり、始まりました。そして、昨年度末までいらした資料情報課長の太幸さん、その前任者の石渡さんを始め、私を入れて 8 人ほどのチームで準備をしてまいりましたが、本日は私が代表して展示会の企画について少しお話したいと思います。

#### 1. 展示会の条件

##### 国際子ども図書館の棚卸しの常設展

国際子ども図書館がオープンして、2011 年 5 月で 11 年です。私は、2000 年 5 月の

部分開館のときの展示会「子どもの本・翻訳の歩み展」の編集にも関わりましたが、国際子ども図書館が日本の子どもの文学の通史を扱うのは今回が初めてです。これまでの半年で終わってしまう企画展ではなく、向こう 5 年くらい開催している言わば常設展として準備しました。

またこの展示は、オープンから 11 年たった国際子ども図書館の資料の棚卸しのような面も、実は持っているのではないかと思います。既に展示を見てくださった方はお気づきかと思いますが、この図書館が所蔵している原資料や複製版が並んでいたり、初版ではなく版違いの資料が並んでいたり、展示は少しごちゃごちゃな状態です。複製版がかえって色がきれいだったり、原本が色が沈んでいたりという面白さもあると思いますが、これは現在国際子ども図書館が所蔵している資料の状態の反映というふうに見ていただければ有り難いです。国際子ども図書館にどういうものがあって、逆にどういうものが無いのかということも、そこらうかがい知ることができると思います。

資料の書誌パネルのデータは、国立国会図書館の蔵書目録をそのまま使っていますが、時代によって目録の取り方が違っているということに気が付きました。例えば、

大日本雄弁会講談社という戦前の講談社の呼び名がありますが、この表記は目録データを反映し、パネルによって正字であったり新字であったりします。

### 展示の構成、子どもの読書の「歴史性」

展示会の構成は、資料をひたすら刊行年順に並べ、そこから折々の問題をパネルとして切り出していくという作り方をしました。歴史をたどっていく展示会ですが、子どもの本の当の読者である子どもたちには、そういった歴史的な観点は無い、ということも同時に考えながら作っていきました。歴史を語るのは、大人たちの仕事なのかもしれません。私の観察では、10歳くらいまでの子どもたちは、自分の好きな本でも作者を意識しません。例えば、私は30年近く大学で教えていますが、私の研究室に来た学生が『おいしいのぼうけん』（ふるたたるひさく、たばたせいいちえ、童心社、昭和49年）と『モグラ原っぱのなかまたち』（古田足日著、田畑精一絵、あかね書房、昭和43年）の作者が同じ古田足日であるということ、子どものときは考えていなかったけれど、私の研究室の本棚を見ていて、いま初めて気が付いたというような場面を何度も目撃しています。このように、子どもが作者を意識しないということは、その作品がどういう時代のものかということも意識しないことにつながり、「子どもの文学の歴史」という問題の立て方は、子ども読者の見方とは少し違うところがあるということ、一応意識しておいたほうがよいのではないかと思っています。

### 展示会は成長する

展示会の資料についてですが、原資料を展示している場合は、その資料があまり疲労しないうちに別の資料と入れ替えたり、同じタイトルの雑誌の別の号に替えたりするなど、ダブルキャストを予定している資料があります。今回の展示会の準備は、国立国会図書館が、国際子ども図書館の資料をデジタル化していくという仕事の中で準備をしてきて大変でしたが、今展示されている複製版をデジタル化の作業から戻ってきた原資料に差し替えることも今後起こるかもしれません。

そして特定の作家や詩人を取り上げる「児童文学者コーナー」は、今は石井桃子ですが、8月23日からは間もなく没後50年になる小川未明に差し替わります。こちらのコーナーでは、半年交代でどなたかをピックアップしてその展示をするということになります。

パネルについても、展覧会がスタートした後に、例えば「ナンセンス児童文学」というパネルを書くべきだったと思いまして、「児童文学者コーナー」を入れ替えるときに、解説パネルについても多少手直しすることを予定しています。

展示資料を削ることはしませんが、足していくようなこともスペースの都合でしていくかもしれません。何が足されるかというのは、今はまだ申し上げることはできませんが、しばらくして訪れた際に、資料目録でかけ離れた番号の資料が新しく加わっていれば、それが追加された資料です。つまりこれは、少しずつじわじわと成長していく展示会というふうにお考えください。

また、3月1日付けでお手元の小冊子を

発行しましたが、まだ図録には手が付いていません。図録は展示会の記録としても重要なので、今年度に企画をして、恐らく来年度刊行になるのではないかと思います。展示会が少し成長したところで図録が作られるという手順になります。今までの企画展と違った常設展になりますから、少し長いスパンで見守っていただくと大変有り難いと思います。

## 2. 時期区分をめぐる問題点

### 空白の戦中期

先ほど申し上げたように、展示はひたすら刊行年順に資料が並んでいますが、一応時期区分はしています。そして、この時期区分は妥当であるかどうかということを少し議論していただいてもいいと思っています。

例えば、最初はあまり古いところからお見せするのではなく、『赤い鳥』(赤い鳥社、[1918]-[1929]) から見ていただくということで、大正期から「童話」の時代と称して『赤い鳥』創刊から戦前まで—「童話」の時代」という区分にしました。

戦前までと言ってしまいましたが、本当ならば敗戦まで、あるいは、戦中戦後まで、と言ったほうが良かったのかもしれませんが。その後は戦後になっていますので、よく考えるとちょうど戦中期が区分の上で空白になっています。それは少し変といえは変ですが、戦中期というのがある種の空白期として意識されていて、それから戦後が始まるという区分になっています。

解説パネルには、「一方で、既成の作家たちは、戦争協力の態勢を強めていきます。

「戦前」と「戦後」のあいだの「戦中」は、

子どもを戦争へと追い込む作品が数多く書かれ、子どものためのものであるはずの児童文学が機能しなくなった空白期といえるかもしれません」(「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」小冊子 p. 5) と書きました。時期区分の中で、最初のところが「戦前まで」としてあり、その次が「戦後から 1970 年代まで」となっていて、戦中というのが見掛け上見えなくなっていますが、その部分は児童文学が機能しなくなった空白期と考えたということをお理解いただければ有り難いです。

この展示会を準備している中で開催に近付いた頃に、山中恒さんの『戦時児童文学論:小川未明、浜田広介、坪田譲治に沿って—』(大月書店、2010年) という本が出版されました。戦中の空白期に、児童文学者たちがどのように戦争に関わる仕事をするようになったのかというようなことがたくさん資料で跡付けられていて大変勉強になりました。山中さんの本を読みながら、今申し上げたようなことを確認したということもありますので、資料に挙げておきました。

### 1980年代から1999年まで—児童文学の現在

時期区分に関してもう一つ申し上げますと、最後は「1980年代から1999年まで」を「児童文学の現在」としています。現在と言うならば、2000年代まで扱わないと現在と言えないのではないかと私も半分思うのですが、2000年代になってからの作品の何をどういうふうに取り上げるかは、もう少し議論を深めないと、私自身もまだ決心のつかないことがたくさんありましたの

で、20世紀の範囲で収めてあります。

1980年からとしたのは、『それいけズッコケ三人組』（那須正幹作、前川かずお絵、ポプラ社、1978年）で有名な那須正幹さんの『ぼくらは海へ』（那須正幹作、安徳瑛絵、偕成社、1980年）という作品が出版されたからで、この作品がそれまでの現代児童文学の在り方と大分違った作品になっているため、ここから次の時代に入ったという考え方をしています。

このように、展示では1999年までのものを出していますが、2000年代にも基本的には1980年代からの状態が続いていると考えています。解説パネルには「その後の児童文学は、理想主義という「決まりきった物語」をのがれて、多様に展開し、2000年代へとつづいていきます」（「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」小冊子 p. 8）と書きましたが、児童文学の理想主義を疑ったのが『ぼくらは海へ』という作品で、それ以降今に続いている、と考えているというふうに見えていただければ有り難いです。

### 3. 日本の子どもの文学の流れをどうみるか

#### 「声」の時代、「声」のわかれ

展示資料をいろいろ扱いながら、「日本の子どもの文学」の流れをどうみるか、ということを考えてきたのですが、いくつか申し上げたいと思います。

展示の最後のほうに「「声」の時代、「声」のわかれ」という見出しのパネルを書きました。戦後1959年から新しい児童文学が始まったと私は考えていて—そのように考える方は他にもいらっしゃると思いますが—

この辺りが、今日の神宮先生のお話につながってくるのではないかと思います。現代の児童文学が出発したときには、それまでの大正から昭和、戦後にかけての、その前の童話の時代の作家たちが主に幼年の子どもたち（学齢前から小学校低学年辺り）を中心読者と考えていたのに対し、佐藤暁の『だれも知らない小さな国』（若菜珪絵、講談社、昭和34年）などは正にそうですが、もう少し年上の10代前半くらいの子どもたちを中心の読者と考え直すようになったのではないか、そしてその年頃の子どもたちが黙読する本として書いていくのが現代児童文学だったのではないか、というようなことを考えております。

大正から昭和、戦後にかけての童話の時代の作家たちは、幼い子どもたちが読者なので、読んであげることのできる童話が大変子どもたちにふさわしい、良い作品だという考えを持っていたと思います。現代児童文学は、10代前半の子どもたちが読者であり、黙読することを予定して書いているので、読んであげる「声」と分かれてしまった。それまでの、明治から昭和、戦後までの児童文学は、むしろ読んであげることのできる作品が良い作品で、そういった作品が目指されていたと思うのですが、読んであげる「声」と分かれて書き言葉として緻密になっていく、それが現代の児童文学だったのではないか、そこに実は大きな転換があったのではないのでしょうか。

国際子ども図書館には子ども連れの家族もよく来られますが、子どもたちにどのように作品が渡されていったかということを見ると、あるときまでは読んであげるものとして渡されていき、あるときからは、

むしろ子どもたちが自分で黙読する本として渡されていく、つまり、読んであげる「声」とは分かれていったと考えるようになりました。

## ほんとうに、「童話」から「児童文学」へ、なのか

それからもう一つの観点です。今の戦後ということに関わりますけれども、童話的なものももっと散文的な児童文学になったという見方が割合一般的ではないかと思えます。夏から展示をする、童話の代表的な作家であった小川未明が大変批判されて、未明童話のようなものとは違うものがその後目指されていきました。確かに大分違った形になっていったのですが、本当に未明の作品に代表されるような童話というものと日本の子どもの文学は、完全に分かれてしまったのでしょうか。「さよなら未明」という言い方があって、未明が批判され、それとは違うものを目指していったとは思えます。でも、2000年代になって振り返ってみますと、その未明的なものは案外あちこちに残っているのではないかと考えています。

小川未明のように人が死ぬとか、草木が枯れるとか、町が滅びるといようなネガティブなテーマは書くべきではないと批判されて新しいものが始まりましたが、80年代以降の日本の児童文学を見ていくと、かつてネガティブなものとして批判された死の問題などが、むしろ子どもたちにとって

も大変大事なテーマだということで見直されるということがありました。

また、小川未明の童話は、大人が読むような小説とあまり境目がなくて、大人の文学と子どもの文学がきちんと分かれていない未分化の児童文学だ、という批判もありました。子どものための文学がはっきり目指されるべきだと50年代から60年代には考えられたと思いますが、やはり80年代以降になると、児童文学の本として書かれているけれどそれが大人たちにも読まれる、正に未分化の児童文学のようなものが改めて書かれ、あるいは読まれていくということがあると思います。

その後、小川未明の作品そのものがたくさん読まれるということはないと思うのですが、批判されたポイントというのは案外復活してきていて、未明的なものというのはむしろ大事なものとして残っているのではないかと、そうだとすると小川未明に代表されるような童話が廃れて新しい児童文学になったという歴史観—今回の展示も基本的にはその歴史観で作っていると思いますが—を本当にこれから先もそのまま維持していった方がいいのかどうか、この辺も後で神宮先生に伺いたいような気がしています。

以上、大変大づかみな話ですが、展示会の条件、時期区分をめぐる問題点、日本の子どもの文学の流れをどう見るか、という三つのことについていくつか具体的にお話ししてみました。ありがとうございました。